

地域食材を輝かせる私たちの6次産業化

—若手の力で進める地域活性—

柴田学園大学 生活創生学部

フードマネジメント学科 2年 みどりレンジャー

○齋藤心愛、石田莉都、木村日胡、田中虎太郎、濱崎葵衣



みどり戦略との関連性

「みどりの食料システム戦略 4 具体的な取り組み」より

- ・(1)資材・エネルギー調達における脱輸入・脱炭素化・環境負荷低減の推進
- ②地域・未利用資源の一層の活用に向けた取組
 - 青森県産・知名度が低い食材を使用した商品開発
- ・(4)環境にやさしい持続可能な消費の拡大や食育の推進
 - ①食品ロスの削減など持続可能な消費の拡大
 - 食材の可食部を最大限使用
 - 原価計算に基づいた適切な価格設定
 - ②消費者と生産者の交流を通じた相互理解の促進
 - 販売時の説明やポップ掲示による食材の説明

目的・背景

私たちは日々の学習で、青森県には魅力的な食材がたくさんあるのにもかかわらず、一般的な消費者にはその存在自体があまり知られていない食材もあることを学んだ。そこで、青森県産の食材について一般的な消費者に知ってもらうことで、地産地消を促進し食料自給率の向上を目的としながら、持続可能な社会を目指したいとした。

さらに、本活動を通じて、自分たちで6次産業化の一連の流れを実践し、地域産業の活性化に本当に必要なのは何か考えるきっかけとした。

など

取組内容

1.レシピ開発：地域・未利用資源の活用を促進する商品の開発

〈メインで使用した青森県産・知名度が低い食材〉

- ・ 米粉用米「あおもりっこ」の米粉
 - ・ プルーン
 - ・ 毛豆
 - ・ りんご(早生ふじ・トキ)

〈完成した商品〉

- ・ 米粉のシフォンケーキ(種類: バニラ、ココア、メープルアーレグレイ) ※あおもりっこ使用 (図1)
- ・ 毛豆カップケーキ ※毛豆使用 (図1)
- ・ 米粉のプルーンスコッキー ※あおもりっこ、プルーン使用 (図2)
- ・ あっぷるんカップケーキ ※りんご、プルーン使用 (図2)



图1 米粉的シフォンケーキと毛豆カップケーキ



图2 プルーンスコッキーとあっぷるんカップケーキ

〈ポイント〉

- ・ りんご、プルーンは皮ごと使用し食品ロスの削減に努めた
- ・ 原価計算で求めた値に基づき適切な価格設定をし、持続可能な消費に努めた
- ・ 材料ごとに必要な量を計算し、なるべく無駄が出ない買ひ方をすることで食品ロスの削減に努めた

2.材料調達

毛豆、プルーンはフードマネジメント学科で収穫を手伝いに農園に行き、1次産業の一部を実践した(図3, 4)。



图3 毛豆の収穫①



图4 毛豆の収穫②

3.パッケージ・POP制作



图5 米粉のシフォンケーキのPOP

アピールしたい食材(青森県産・未利用資源)を文字・イラストで分かりやすく表示したパッケージシールを制作し、知名度向上を図った(図5)。



图6 制作中の様子

4.商品制作

教員の管理のもと、学内の調理室を使用し、フードマネジメント学科の学生で制作した。その際、食材を無駄にしないよう注意した(図6)。



图7 販売の様子

5.イベントでの販売：第50回あおもりマルシェ・学園祭・うまい森青いもりフェアin弘前の3つのイベントで販売

全イベントで、販売する際に商品・使用した食材についての説明も行った。あおもりマルシェ・学園祭では、使用した毛豆を育てている農家さんも出店していることをアピールし、消費者と生産者の交流を促進する掛け橋の役割を果たせるよう努めた(図7)。

6.アンケート集計：全イベントで購入者を対象にQRコードによるアンケートを行い、各イベント終了後に集計

消費者の意見を把握することで、次に参加するイベントに向けて、多くの人の興味を引く商品づくりや販売方法の考案に役立てた。

7.学園祭での展示

フードマネジメント学科で学んだ内容や活動について、一般の人にも知ってほしい情報をポスターにして掲示し、消費者へ向けた食育を行った(図8)。



图8 展示の一例

結果

- ・ アンケート結果や販売時の試食での会話から、「毛豆がお菓子に合うことが分かった」「米粉で美味しいお菓子ができるのを初めて知った」「子供がいると米粉を使用した無添加のお菓子はとても助かる」「野菜を使用したお菓子が食べたい」などという意見が得られた
- ・ 青森県民の知名度が低い食材について、美味しさや魅力、新たな食べ方を広めることができた

考察・まとめ

今回は、青森県産・知名度が低い食材として毛豆やプルーンなどを使った商品を開発・販売し完売することができた。他の食材でも同じ方法が有効であると言え、この取り組みによる地産地消の促進が期待できる。マルシェへの出店から、若手農業従事者が減っているという課題があることが分かったため、学園祭では若い世代が農業に興味を持つきっかけになるような展示などを行った。今回の取り組みで、毛豆の収穫から販売までの6次産業化を実践したと言え、今後は、自分たちが学んだことや実践してきたことをわかりやすくまとめ、イベントやSNSを通じて若手農業従事者や学生をはじめとした世間に広めていくことを目標として活動していくたい。